震災関連ドキュメンタリー、10年を越えて問うていくもの
―「次に来る災害」に向けた番組群の分析―

古 澤　　健*

1．はじめに

東日本大震災の発生から11年が経過した2022年3月は、コロナ禍に加えて、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻という大きなニュースが重なったこともあり、震災関連の報道は前年に比べて大きく減少した。そもそも10年という節目を過ぎたことによる震災への社会の関心の低下や記憶の風化は否めない。

しかしながら、東日本大震災について、テレビが伝えるべき事象がなくなったわけではない。大切な人を亡くした家族の無念、「道半ば」とされる被災地の復興、東京電力福島第一原発の事故により避難指示が出されたままの帰還困難区域や見通しが立たない廃炉作業など、メディアが継続して取り上げるべきテーマは数多く存在したままである。

報道量は減少していても、伝えるべき内容が減ったわけではない。とすれば、何が報じられ続け、何が報じられなくなったのか。この点を考察するのは、今後の震災報道の社会的役割を考える上で重要な意味を持つことになる。

本稿は、東日本大震災を扱ったテレビ報道の中でも、持続的な報道や調査報道において大きな役割を果たしてきたドキュメンタリー番組（以下、「震災関連ドキュメンタリー」）に注目し、震災から11年あまり間の量的・質的傾向を分析する。特に注目するのは、今後起きる可能性の高い災害への警鐘を鳴らす番組群（以下、「次に来る災害」）である。このテーマの番組が、いつごろから登場し、どのくらいのウエイトを占め、どんな内容を扱ってきたのか。こうした点を明らかにすることで、震災関連ドキュメンタリーの方向性を探り、課題を検証することを本稿の目的とする。

2．「震災報道」（「震災関連ドキュメンタリー」を含む）をめぐる研究動向

⑴ 「震災報道」の量的減少傾向について

東日本大震災から11年が経った2022年3月、震災を伝えるテレビにも大きな変化が見られた。2022年の地上波の放送時間の合計は61時間26分で、震災5年の2016年（109時間39分）の5分の3以下、震災10年の2021年（128時間33分）の半分にも満たなかった。[(1)]（熊谷百合子2022：90）

テレビが伝えてきた東日本大震災については、この11年の間、繰り返し検証が行われ、報道量の減少傾向が指摘されてきた。

原由美子他（2015，2017，2019：68－70）は、震災発生から7年間について、NHKと民放の「夜間のキャスター番組」の時間量の推移を明らかにした。震災発生からしばらくは減少傾向が続くが、1年後の2012年3月に報道量が急増する。しかしその後は、毎年3月になると報道量が増える「3

*ふるさわ　たけし　NHK首都圏局 首都圏ネットワーク編責、新聞学研究所研究員

月ジャーナリズム」化の傾向が見られるものの、全般には減少傾向が続くことを明らかにした。

また、一連の研究の中で原由美子・大高崇（2019：122－123）は、震災報道が扱うテーマについて、「震災関連番組の内容は、被災地の様子や被災地の状況を伝えるものから、次に起こるかもしれない災害への備えや防災・減災に比重が移りつつあるようだ」と分析している。また、東日本大震災以降、大規模な自然災害が続けざまに起きていることから、「東日本大震災の被災が相対化され遠景化していくのは、ある意味、仕方がないことなのかもしれない」「被災地の記憶や現状、将来に軸足を置くべきか、『明日は我が身』の防災対策に軸足を置くべきか、一概にはどちらよいとは言えない」と、今後の震災報道のあり方に一石を投じた。

⑵ 震災関連ドキュメンタリーについての量的・質的分析

テレビの震災報道を分析するにあたって本稿では、特に「震災関連ドキュメンタリー」に着目して分析を進める。震災報道が内包する多岐に渡るテーマについて、11年あまりの長期的な傾向をとらえるのにドキュメンタリー番組は適しているからである。

震災報道におけるドキュメンタリー番組の役割について、丹羽美之（2013：359－261）は、「ニュースからの『忘れ物』を拾い集める営み」とし、持続的な報道や調査報道に果たした役割を評価した。

古澤健・米倉律（2021）は、震災発生直後から10年あまりにわたるNHKと民放の5つのドキュメンタリー番組について、[(2)] 8つのテーマに分類して分析を行い、おもに以下の4つの傾向を明らかにした。

■震災報道全般と同様に、震災関連ドキュメンタリーについても2011年から2012年をピークに、その後はおおむね放送本数の減少が確認された。[(3)]

■『NHKスペシャル』（NHK）については、毎年3月に放送が集中する「3月ジャーナリズム」化の傾向が顕著に確認され、年を追うごとに3月に放送される割合が上昇する傾向が見られた。

■『NHKスペシャル』についてテーマ別に分類したところ、「津波系」41％、「原発系」34％、「次に来る災害」18％、その他7％であった。

■「次に来る災害」（『NHKスペシャル』）は、ほかのテーマに見られる経年による放送本数の減少が見られず、また、3月に放送された番組は確認できなかった。[(4)]

⑶ 震災報道における「次に来る災害」というテーマ

災害と放送との関わりは日本の放送の黎明期から続いている。1923年の関東大震災のおよそ2年後、1925年に日本の放送は誕生するが、小田貞夫（2003）は「関東大震災はラジオの誕生を促した」とし、その後、放送が災害のたびに伝え方を向上させ、「次に来る災害」での被害の軽減に貢献してきた歴史をまとめている。その中で、1959年の伊勢湾台風や1983年の日本海中部地震を例にあげ、被害をいち早く伝えるだけでなく、避難を呼びかけることで被害を未然に防ぐ役割を拡充させてきたことを指摘している。

2011年に発生した東日本大震災は未曾有の大災害であっただけに、日本人の防災意識にも大きな影響を与えた。震災そのものが与えたインパクトもさることながら、この震災の後に地震や台風、集中豪雨、火山の噴火など、大規模な災害が全国で相次いだことが防災意識を高めたと見られる。大地震が起きる不安を『感じている（大いに・ある程度）』と答えた人は、全国で84％、被災3県（岩手・宮城・福島）が87％で、不安に感じている人が圧倒的に多いことが指摘されている（小林

利行、中山準之助、河野啓2021：46－49)。

中でも、東日本大震災の後、日本人の防災意識に特に影響を与えた出来事は、2012年に相次いで公表された南海トラフ巨大地震と首都直下地震の被害想定であろう（NHK：『命を守る防災サイト』)。政府の中央防災会議は、南海トラフ沿いで起きる最大クラスの地震の規模をマグニチュード9.1とし、各地を襲う津波の高さは高知県黒潮町と土佐清水市で34メートル、静岡県下田市で33メートルなど、静岡県、和歌山県、徳島県、高知県、宮崎県の沿岸部のほとんどの地域が被害に見舞われる想定をまとめた。また、首都直下地震については、最悪の場合、死者はおよそ2万3,000人、経済被害はおよそ95兆円に達すると想定している（2013年公表)。

近い将来、高い確率で発生すると指摘される南海トラフ巨大地震、首都直下地震に対して、東日本大震災の教訓をどのように生かすべきかを考える番組は、いうまでもなく極めて重要である。このような経緯から、この11年あまりの震災関連ドキュメンタリーにおいて、「次に来る災害」に属する番組群の存在感は大きなものになっていった。

3．「次に来る災害」の動向と定義

まず、震災関連ドキュメンタリーの最近の傾向をつかむために、大きな節目となった震災10年の2021年3月と翌年の2022年3月の放送本数を計上したところ、NHK、民放ともに本数の減少が確認された（表3－1)。

表3－1

	2021年3月	2022年3月
『NHK スペシャル』（NHK）	8	2
『NNN ドキュメント』（日本テレビ系列）	3	2
『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）	3	2
『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』（TBS 系列）	1	0
計	15	6

このうち、2022年3月に放送された6本を以下に列記する（表3－2)。

表3－2

NHK スペシャル	被災の海　未来をどう築くか	2022年3月11日
NHK スペシャル	あなたの家族は逃げられますか？ ～急増　“津波浸水域”の高齢者施設～	2022年3月12日
NNN ドキュメント	それぞれの交“差”点～被災地の本音～	2022年3月6日
NNN ドキュメント	さらば、じじい部隊　老いてなお…原発のまちで	2022年3月20日
テレメンタリー	家族になった被ばく牛～11年目の決断～	2022年3月6日
テレメンタリー	どうする、大槌	2022年3月13日

注目すべきは、2022年3月12日に放送された『NHK スペシャル　あなたの家族は逃げられます

か？～急増 “津波浸水域”の高齢者施設～』（NHK）である。この番組では、東日本大震災で多くの高齢者施設が津波にのまれ多数の人命が失われたにもかかわらず、震災後、津波の浸水想定地域に次々と高齢者施設が作られている実態を調査したものである。東日本大震災の被災地は当時の事例としては描かれているが、番組に登場する取材対象の多くは、被災地以外の事例である。

画像3－1
『NHK スペシャル
あなたの家族は逃げられますか？
～急増 “津波浸水域”の高齢者施設～』
（NHK、2022年3月12日）

震災関連の『NHK スペシャル』は200本を超えているが、東日本大震災の被害状況や被災者・被災地を直接取り上げていない内容の番組が「3月」に放送されたケースはこれまではなかった。古澤健・米倉律（2021：38－39来る災害」をテーマにした『NHK スペシャル』が3月には放送されていない状況について、「3月はあの震災に思いをはせるべき」といった、3月を「聖域」とする制作者サイドの無意識の「意思」ではないかと考察している。ところが2022年3月には、明らかに「次に来る災害」を想定した内容の『NHK スペシャル』が放送された。

上記の事例からも、震災関連ドキュメンタリーの中で、「次に来る災害」に属する番組群の存在感が年々高まっているのではないかと考え、この11年あまりの放送本数を計上した。

今回の研究で分析の対象にした番組の中には、阪神淡路大震災など東日本大震災以前の災害を扱った番組や、熊本地震など東日本大震災後に発生した災害を取り上げた番組も存在し、厳密な意味で「東日本大震災」の震災関連ドキュメンタリーの定義から遠い番組も含まれている。しかし本稿では、番組テーマを選別する際の人為的な判断をできるだけ避けるため、これらすべてを「次に来る災害」に分類し分析を行った。

本稿で対象としたのは、表3－3に示した NHK、民放の4つのドキュメンタリー番組である。[(5)]

表3－3

『NHK スペシャル』	NHK
『NNN ドキュメント』	日本テレビ系列
『テレメンタリー』	テレビ朝日系列
『報道の魂』『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』	TBS 系列

東日本大震災以降に放送されたこれらの4番組のうち、表3－4に示す7つの小分類にあてはまるものをピックアップし、「次に来る災害」というテーマに属すると定義した。[6]

表3－4

①	地震研究・津波研究の最前線
②	南海トラフ巨大地震・首都直下地震などの被害想定の検証
③	過去の災害（東日本大震災を含む）から得られた教訓
④	記憶の伝承への取り組み
⑤	福島第一原発事故以外の原発・エネルギー問題
⑥	東日本大震災以外の地震災害（直後の報道を含む）
⑦	その他（政治経済のあり方、地震・津波以外の豪雨災害など）

4.「次に来る震災」関連番組の量的・質的分析

「次に来る災害」に属する番組を7つの小分類に分けた本数を以下の表4－1にまとめた。なお、⑦「その他」の分類は、分析の対象からはずした。[7] NHK と民放では、各項目によって放送本数に大きな違いが見られた。

表4－1

小分類	NHK スペシャル	NNN ドキュメント	テレメンタリー	TBS 系
①	14	0	0	0
②	14	0	0	0
③	11	0	4	0
④	1	2	0	1
⑤	11	12	5	5
⑥	12	15	17	1
合計	63	29	26	7

以下、小分類ごとに量的・質的分析を行った。なお、表4－1に含まれる全番組については、巻末に付表として放送日・番組名・内容の一覧を添付した。

(1) 小分類①「地震研究・津波研究の最前線」および小分類②「南海トラフ巨大地震・首都直下地震などの被害想定」について

『NHK スペシャル』では①が14本、②は14本放送されているが、民放ではこのテーマに該当する番組の放送は確認されなかった。

東日本大震災の発生以後、具体的に「次に来る災害」をおもなテーマに制作された最初の番組

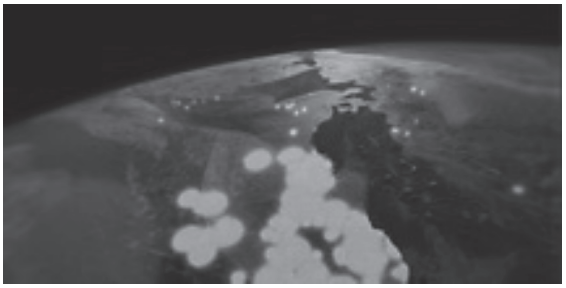
は、2011年9月1日に放送された『NHK スペシャル　巨大津波が都市を襲う～東海　東南海　南海地震～』（NHK）であろう。

画像4－1
『NHK スペシャル
巨大津波が都市を襲う
～東海　東南海　南海地震～』
（NHK、2011年9月1日）

「防災の日」に放送されたこの番組は、東日本大震災をきっかけに、東海・東南海・南海地震が同時に起こる「3連動地震」の被害想定の見直しに国が乗りだしたことを踏まえ、CG などによる具体的な描写で警鐘を鳴らしている。この時点での最新の研究を踏まえ、予測の2倍近くの津波が沿岸を襲うことや、これまで被害を想定していなかった都市にも津波が到達する可能性を指摘した。

この番組の中で取り上げられている2003年当時の国の被害想定によると、地震・津波による死者は28000人となっているが、その後公表された新たな被害想定ははるかにこの数字を上回ることになった。東日本大震災が、当時の地震・津波の被害想定の前提を根底から覆したことを伝える内容であった。

その後、年度が改まった2012年4月1日からは、『NHK スペシャル』の大型シリーズ『MEGAQUAKE Ⅱ　巨大地震の第1回　いま日本の地下で何が起きているのか』（NHK）が始まっている。



画像4－2
『NHK スペシャル　MEGAQUAKE Ⅱ　巨大地震
第1回　いま日本の地下で何が起きているのか』
（NHK、2012年4月1日）

NHK では、東日本大震災の前年2010年に MEGAQUAKE の最初のシリーズを放送しているが、このときは阪神淡路大震災やスマトラ島沖地震の津波などをきっかけに当時の地震研究の最前線に迫った内容であった。東日本大震災をへた2012年以降、NHK では毎年のように MEGAQUAKE シリーズの続編が放送されていった。MEGAQUAKE Ⅱ（2012年）、MEGAQUAKE Ⅲ（2013年）、MEGA DISASTER（2014年）、MEGA DISASTER Ⅱ（2015年）、MEGA CRISIS（2016年）、MEGA CRISIS 巨大危機Ⅱ（2017年）と放送され現在に至っている。

このテーマの番組が急増する契機となったのは、2012年に相次いで公表された南海トラフ巨大地震と首都直下地震の新しい被害想定である。南海トラフ巨大地震の新たな被害想定が公表された直後に放送されたのが、『NHK スペシャル　シリーズ日本新生　“死者32万人”の衝撃　巨大地震か

ら命をどう守るのか』（NHK、2012年9月1日）である。

画像4－3
『NHK スペシャル　シリーズ日本新生
“死者32万人”の衝撃　巨大地震から命をどう守るのか』
（NHK、2012年9月1日）

国は、それまでの「過去数百年の記録に基づく」旧想定から、「科学的にあらゆる可能性を想定」した新想定に防災対策を大転換した。その結果、南海トラフ巨大地震の被害想定は、旧想定の死者25000人から、13倍の32万人に見直された。番組では、最大で高さ34メートルの津波に見舞われると想定された高知県黒潮町などで災害対策を抜本的に見直す必要性が指摘され、一刻も早い避難の方策が討論形式で検討された。

震災関連ドキュメンタリー全般の放送本数の年を追うごとに減少している中、最近になって、「次に来る災害」をテーマにした特徴的な大型シリーズも放送されている。東日本大震災から9年近くたった2019年12月、1週間にわたって全7本の『NHK スペシャル　シリーズ 体感 首都直下地震』（NHK、2019年12月1日『プロローグ』）が放送された。ドラマとドキュメントを組み合わせた“超”大型企画である。

画像4－4
『NHK スペシャル
シリーズ　体感　首都直下地震
プロローグ　あなたは生きのびられるか』
（NHK、2019年12月1日）

今後30年以内に70％の確率で起こるとされる首都直下地震について、内閣府の被害想定19パターンの中で最も被害が大きくなるとされる「都心南部が震源」「冬の夕方」「風速8メートル」という想定で、マグニチュード7.3、最大震度7が起きた東京の様子が克明なドラマで描かれた。7回にわたるシリーズは、プロローグから始まり、地震発生から4日間を日付ごとに制作し、1か月後、1年後、10年後の影響や、被害を最小限に食い止めるための具体的な対策などに盛り込まれている。

一方、民放の震災関連ドキュメンタリーには、小分類①②に該当するテーマの番組は確認できなかった。

⑵　小分類③「過去の災害（東日本大震災を含む）から得られた教訓」について

このテーマの番組は、『NHK スペシャル』11本、民放（『テレメンタリー』）4本であったが、内

容の傾向は大きく異なった。

『NHK スペシャル』では、関東大震災や阪神大震災などの過去の地震災害の科学的な検証をもとに「次に来る災害」への教訓を導きだそうとする傾向が見られた。また、東日本大震災からも「教訓」を導きだし、「次に来る災害」に備えることを目的にした番組が放送されてきた。2013年3月3日の『NHK スペシャル “いのちの記録”を未来へ～震災ビッグデータ～』(NHK) では、カーナビや GPS 情報などのビッグデータを分析し、未来の防災に役立てる試みが取り上げられた。[8] このように NHK では、早い段階から東日本大震災を客観的にとらえ、将来の教訓につなげようという試みが行われてきた。

一方、民放では、古文書・歴史書などから過去の災害をひもといたり、昭和の東南海地震、チリ地震津波などを大過去の災害を掘り下げたり、大過去（阪神淡路大震災より前）の地震災害・津波災害の検証した番組が見られた。

震災発生から4か月後に放送された『テレメンタリー “3.11”を忘れない⑥～古文書が語る巨大津波～』（テレビ朝日系列、2011年7月25日）は、古文書に記載された過去の地震の記述から、今後の起きる津波の被害を想定し警鐘を探ることをめざした番組であった。東日本大震災の被災地、宮城県名取市閖上地区には、869年の貞観地震の際も東日本大震災とよく似た巨大津波に見舞われた「わずか数百文字の記述」が残されていた。番組では、大阪市や浜名湖などの過去の古文書の記述を手がかりに今後の地震・津波対策につなげようとする研究者たちの取り組みを取り上げている。

画像4－5
『テレメンタリー “3.11”を忘れない⑥
～古文書が語る巨大津波～』
（テレビ朝日系列、2011年7月25日）

このほかにも『テレメンタリー』では、『隠された震災～昭和の東南海地震』(2012年9月17日)、『海に沈んだ村を探せ！～歴史書に残る南海地震の痕跡を求めて～』(2017年2月19日)、『津波はまた来る ～カラー化でよみがえるチリ地震津波の記憶～』(2018年5月20日）といった過去の地震・津波災害をひもとくことで、東日本大震災を検証したり、次に来る災害への備えにつなげたりといった取り組みが見られた。

⑶ 小分類④「記憶の伝承への取り組み」について

NHK スペシャルで1本、民放で3本と放送本数は少ないが、いずれも2013年から2014年にかけて集中して放送されている。

2013年は、「震災遺構」の取り扱いをめぐり「保存」か「解体」か、激しい議論が交わされた年であった。宮城県南三陸町では、もともと2013年度中に解体される予定だった防災庁舎をめぐって、町の対応が二転三転する事態が続いていた。

『NHKスペシャル　東日本大震災　震災遺構～悲劇の教訓をどう伝えるか～』（NHK、2013年11月29日）では、国が打ち出した「震災遺構」への支援の方針や広島の原爆ドームの経験を学ぶ被災地の住民たちの動きを取り上げた。

『NNNドキュメント　もの言わぬ語り部　震災遺構 伝承のカタチ』（日本テレビ系列、2013年12年22日）では、取り壊しが始まろうとしている岩手県釜石市の「鵜住居防災センター」をＣＧで残す取り組みや、一度は取り壊しが決まった宮城県南三陸町の「防災対策庁舎」をめぐって、地元住民の揺れる心情と、宮城県県知事や復興大臣による保存に向けた発言を取り上げ、震災遺構をめぐる議論を追った。

また、このころ、震災の記憶を後世に伝える手段として「石碑」などの役割に注目が集まり、女川町の中学生による「いのちの石碑プロジェクト」（2013年～）が立ち上がった。

『NNNドキュメント　千年後のあなたへ　15歳…いのちの石碑』（日本テレビ系列、2014年4月5日）では、女川中学校3年生たちが、町内21の浜の最大津波到達地点に石碑を建てることをめざし、必要な資金を募金で集めるなどの活動を克明に追った。千年後の命を守るため“命の石碑”の1基目には「夢だけは　壊せなかった　大震災」という生徒たちが授業で考えた俳句が刻まれた。

画像4－6
『NNNドキュメント
千年後のあなたへ　15歳…いのちの石碑』
（日本テレビ系列、2014年4月5日）

⑷　小分類⑤「福島第一原発事故以外の原発・エネルギー問題」について

このテーマに該当する番組では、NHKと民放の間に、放送時期と内容に大きな相違が確認された。

放送時期について、NHKは2013年までに放送が集中していて、その後は放送されていない。一方、民放では、最近に至るまで継続的に放送されている。

また、内容についてもNHKと民放では大きく傾向が異なった。『NHKスペシャル』（NHK）では、原発事故後のエネルギー政策を問い直す議論や、再生可能エネルギーへの転換を探るような、大局的な視点の内容が多く見られた。

一方、民放では多岐にわたるアプローチの番組が放送されている。ビキニ水爆実験、海外の原発政策や原発事故の検証、また、（福島第一原発以外の）国内各地の原発や立地自治体の状況、再稼働への動きなどが取り上げられている。

このテーマに該当する『NHKスペシャル』11本について、放送日、タイトル、おもな内容、放送当時の状況を以下の表4－2にまとめた。

表4－2

№.		放送日	タイトル	おもなテーマ・放送当時の状況
①		2011年8月21日	新エネルギー覇権争奪戦 ～日本企業の闘い～	再生可能エネルギーへの模索
②	③	2011年8月25日 2011年8月27日	シリーズ日本新生 どう選ぶ？わたしたちのエネルギー 第一部・第二部　市民討論	再生可能エネルギー買い取り法案成立
④	⑤	2011年10月22日	シリーズ日本新生 “食の安心”をどう取り戻すか 第一部・第二部　市民討論	福島の農家の苦闘 福島産への消費者の不安
⑥		2012年5月19日	原発の安全とは何か ～模索する世界と日本～	アメリカ・スイスなど、 海外の原発の安全性追求の取り組み
⑦		2012年7月14日	激論！ニッポンのエネルギー	2030年に向けたエネルギーバランスの意見聴取を民主党政権が呼びかけ
⑧		2013年2月10日	“核のゴミ”はどこへ ～検証・使用済み核燃料～	再稼働すれば使用済み核燃料が2年で満杯に。核燃料サイクル事業の検証
⑨		2013年2月16日	シリーズ日本新生 どうするエネルギー政策	安倍政権「2030年代、原発ゼロ方針」見直しを打ち出す
⑩		2013年6月2日	密着　エネルギー争奪戦 ～日本の逆襲～	アメリカでの「シェールガス革命」 各国との安価な天然ガス争奪戦
⑪		2013年10月7日	原発テロ ～日本が直面する　新たなリスク～	再稼働に向けた安全対策の見直し、 迫られる

11本の『NHK スペシャル』から見て取れるのは、原発事故直後の大胆なテーマ設定から、しだいに、原発再稼働に向けた現実的なテーマに移り変わっていく傾向であった。

大別すると、2011年に放送された①②③は、原発事故直後の衝撃を踏まえ、日本のエネルギー政策を抜本的に見直そうというテーマ設定である。

番組①の冒頭、印象的なのは、ソーラーシティ社会長のイーロン・マスク氏が福島県相馬市を訪れ、太陽光発電システムを相馬市に寄贈する場面である。原発事故を契機に新エネルギー開発の覇権争いが世界で始まっている、というテーマを描いた象徴的なシーンであった。

番組②③は、電気事業者が再生可能エネルギーの固定価格での買い取りを定めた「再生可能エネルギー買い取り法案」の成立直前に放送された。番組では、「自然エネルギーへの転換がどこまで可能か」をおもなテーマに、有識者と市民の徹底討論が行われた。原発事故以前は1％程度だった自然エネルギーをどうやって増やしていくのかが議論の焦点であった。

番組④⑤は2011年当時、影響が広がっていた食品への放射線の問題について取り上げている。

2012年になると、国のエネルギー政策の見直しについて本格的な議論が始まっていく。民主党政権は2012年9月、「2030年代に原発稼働ゼロ」を目指すことをいったん掲げた。その2か月前の2012年7月の番組⑦では、スタジオに古川元久国家戦略担当大臣を招き、有識者と市民とで討論が行われた。2030年のエネルギー政策について、「1. 原発ゼロ」、「2. 原発15％」、「3. 原発20-25％」という具体的な3つの選択肢をあげて、どれが妥当かを議論する内容であった。

2012年12月、民主党から自民党を中心とした政権に変わり、2013年になって放送された番組⑧⑨

⑩は、それぞれ原発の運転再開を視野に入れたテーマ設定が見て取れる。

番組⑧は、核燃料サイクル事業が行き詰まっている現状で原発の運転を再開すると、各地の原発で保管されている使用済み核燃料が行き場を失い、2年で満杯になるという問題意識から、最終処分地の選定などを急ぐべきと指摘した内容である。

番組⑨では、アメリカでの「シェール革命」によって、原発事故後、日本では火力発電の占める割合が9割に達し、燃料費が増加している実態が報告され、原発再稼働に向けた新しい「安全基準」のあり方が検討された。

このあと、2014年9月には九州電力川内原発1号機が安全審査に合格し、翌年8月に再稼働した。2021年2月時点までに全国で5原発9基が再稼働している。

2013年10月以降、日本のエネルギー政策を問い直す番組や原発そのものの安全性を問う番組は『NHK スペシャル』では放送されていない。

震災以降、『NHK スペシャル』では、福島第一原発の事故そのものを検証した番組は、民放に比べても数多く放送されている。長期に渡る大型シリーズ「メルトダウン」や「廃炉への道」などである。しかし今回の分析によって、放送本数の比較からだけでは浮かび上がらなかった、NHKと民放の内容面の明らかな相違が確認された。

一方で、民放では、原発の安全性やエネルギー政策の見直しを迫る番組のほかに、福島第一原発以外の原発（または原子力施設）を取り上げた番組が見られたことが、NHK にはない特徴的な傾向であった（表4－3）。

表4－3

『NNN ドキュメント』（日本テレビ系列）	
シカとスズ　勝者なき原発の町	2014年12月21日
避難計画で原発やめました　違いは何だ？ 伊方と米・ショアハム	2016年7月24日
“夢の原子炉”は夢だった　もんじゅ廃炉の内幕	2017年2月19日
『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）	
国策に賭けた町～原発誘致のジレンマ　※山口県・上関原発	2011年11月14日
過疎を取るか　核を取るか ～「核のごみ」処分場に揺れるマチ～　※北海道寿都町・神恵内村	2020年11月29日
『報道の魂』『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』（TBS 系列）	
検証・伊方原発 問い直される活断層	2012年5月7日
届かない声…フランス『核のゴミ』最終処分場に揺れる村	2018年11月18日
核と民主主義 ～マチを分断させたのは誰か～　※北海道寿都町	2021年3月7日
検証・伊方原発 問い直される活断層	2012年5月7日

これらの民放の番組に共通するのは、福島第一原発の事故のあと、原発（または原子力施設）に依存してきたまちのあり方を見つめ直すというテーマ設定である。放送時期については、最近まで放送が継続している。

⑸ 小分類⑥「東日本大震災以外の地震災害」（直後の報道を含む）について

『NHK スペシャル』（NHK）では12本、民放では『NNN ドキュメント』（日本テレビ系列）15本、『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）17本、『報道の魂』（TBS 系列）1本と、数多くの番組が放送されている。

NHK、民放ともに多くを占めたのが、阪神淡路大震災に関連した番組と、2016年4月に発生した熊本地震など、東日本大震災以外の地震災害について取り上げた番組である。

東日本大震災の発生から4か月後の2011年7月11日に放送された『NNN ドキュメント　わたしたち 環境防災科　震災を語り継ぐ高校生』（日本テレビ系列）では、阪神・淡路大震災後に「地域の防災リーダー」を育てるために設立された兵庫県立舞子高校環境防災科の生徒たちによる宮城県でのボランティア活動に密着した番組である。[(9)] また、2012年1月17日に放送された『NHK スペシャル　阪神・淡路大震災17年　東北復興を支えたい～“後悔”を胸に～』（NHK）では、阪神・淡大震災で復興にあたった人たちが、当時の教訓を踏まえ、東日本大震災の被災地で活動する様子を記録した。いずれも、阪神・淡路大震災での教訓・課題を東日本大震災の復興にどう生かすかという視点の番組である。

阪神・淡路大震災から20年にあたる2015年1月、『NNN ドキュメント』（日本テレビ系列）は2週にわたって、2つの震災に関連する番組を放送した。『阪神・淡路大震災から20年①　ボランティア 黒田裕子 被災地への遺言』（2015年1月11日）では、神戸から宮城県気仙沼に通うなど、2つの震災でボランティアを続けてきた元看護師の活動を追った番組である。また、『阪神・淡路大震災から20年②　ガレキの街の明暗　誰のための復興か』（2015年1月18日）は、神戸市長田区の「再開発」に東日本大震災の被災地からの視察が次々やってくる様子を取り上げ、復興のあり方を検証した。

最近でも、2021年1月17日に放送された『テレメンタリー　記憶のバトン』（テレビ朝日系列）は、阪神・淡路大震災と東日本大震災の2つの被災地を舞台に、神戸の女性と気仙沼の高校生との絵を通じた交流や「心の復興」を描いた。

2016年4月14日と16日に震度7の揺れに見舞われた熊本地震について、『NHK スペシャル』（NHK）は4月16日に『緊急報告　熊本地震　活断層の脅威』を放送した。その後、熊本地震に関連する『NHK スペシャル』は7本放送されているが、東日本大震災と関連づけた内容の番組は見られなかった。同様に民放でも、熊本地震に関連する『NNN ドキュメント』（日本テレビ系列）は5本、『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）は9本が放送されているが、東日本大震災と強く関連づけたり、比較したりといった内容の番組は確認できなかった。

5．まとめと考察

⑴ 何が報じられ、何が報じられなくなったのか

震災報道全般が年々減少する傾向にある中で、「次に来る災害」に属するテーマの番組は本数の減少が見られない。このことはいったい何を意味しているのだろうか。

震災関連ドキュメンタリーの中で最も放送本数が多い『NHK スペシャル』（NHK）は、震災10年の2021年3月と翌年2022年3月に放送された本数を比較すると、8本から2本と激減している。

内容面でも変化が見られた。2021年3月の『NHK スペシャル』では、津波にのまれた男性が屋根に乗って3日間漂流した実話に基づく『ドラマ　星影のワルツ』（NHK、2021年3月7日）や、福

島県浪江町出身のディレクターがふるさとの人たちの10年をたどる旅に出る『私と故郷と原発事故』（NHK、2021年3月9日）など、バラエティに富んだ、意欲的な番組が放送された。翌年の震災11年、2022年3月は、コロナ禍やロシアによるウクライナへの軍事侵攻の影響があったものの、被災者・被災地の立場に立ち、その声に耳を傾ける番組、「寄り添う報道」（米倉律、2016）が減少したと言える。

民放では、2022年3月においても、数は多くはないが「寄り添う報道」が継続している。『NNNドキュメント　東日本大震災11年　それぞれの交“差”点～被災地の本音～』（日本テレビ系列、2022年3月6日）、『NNNドキュメント　3·11大震災シリーズ（100）

さらば、じじい部隊　老いてなお…原発のまちで』（日本テレビ系列、2022年3月20日）、また、『テレメンタリー　“3.11”を忘れない86　ひとが減るまちで　～震災11年の憂い～』（テレビ朝日系列、2022年2月13日）『テレメンタリー　3.11を忘れない88　どうする、大槌』（テレビ朝日系列、2022年3月13日）などである。

東日本大震災の発生から時がたつにつれ、「寄りよう報道」が減っていき、「次に来る災害」が増えていく。この傾向は（放送本数全体が多い）NHKにより顕著であった。象徴的なのは、2019年の『NHKスペシャル』（NHK）の大型シリーズ『体感　首都直下地震』である。1週間に7本と集中的に編成されるなど、「次に来る災害」に備える重要性を強く打ち出した編成・内容となっていた。

今後もこの傾向は継続していくと見られるが、報じられなくなっているテーマについても見過ごすことはできない。被災地の復興は「道半ば」であり、失われた命や故郷が取り戻せない事実を、いま一度、かみしめるべきではないか。

⑵　NHKと民放の異なるアプローチついて

震災関連ドキュメンタリー全般についても、NHKと民放では放送規模や内容の傾向は異なるが、「次に来る災害」というテーマに限定しても、際だった違いがいくつか確認された。

その一つが、小分類①「地震研究・津波研究の最前線」と小分類②「南海トラフ巨大地震・

首都直下地震などの被害想定」に該当する内容の番組が民放では確認できなかったことである。その理由は、制作費の制約と思われる。『NHKスペシャル』（NHK）の『MEGAQUAKE』などの大型シリーズには大量のCGや数値シミュレーションが使われているが、こうした演出には多額の制作費がかかる。

民放が制作してきた震災関連ドキュメンタリーの多くは、深夜帯の放送時間のため、低予算を強いられることが多い。制作主体が地方の系列各社による場合も多く、さらに予算規模は限られてしまう。また、地方の民放の場合、その経営規模の点から、専門的な知識を持った人材を育てていくことについて「養成する余裕がない。現実的に厳しい」と見られている（日本大学法学部新聞学研究所、2021）。

⑶　原発・エネルギー政策を問う番組の必要性

ここ数年、CO2削減への世界的な取り組みが強く求められている。特に、CO2排出量が多い先進国ほど、エネルギー政策の転換が必要である。また、2022年2月より続いているロシアによるウク

ライナへの軍事侵攻は、資源が偏在する化石燃料への依存の危うさを物語っている。それだけに、いまこそ、あらためて原発の是非を問うことやエネルギー政策を大胆に見直すことを議論すること、メディアが議論の場を提供することが必要なのではないか。震災の教訓を次の世代に伝えていくことが震災ドキュメンタリーの使命であるなら、いまこそ、エネルギー政策の根底を問い直すテーマ設定が求められている。

『NHK スペシャル』（NHK）が、震災直後から2013年までの限られた期間ではあったが、原発そのものの是非やエネルギー政策の見直しを問う番組を放送してきたことはとても意義あることであり、いまあらためて、同じ問いに向き合うべき時期にさしかかっていると言える。

また、民放が、福島第一原発以外の（海外を含む）各地の原発に目を向けてきたことも意義あることである。国は、安全性を大前提とし、地元の意見を聞きながら、各地の原発の再稼働を進める方針である。社会全体が原発との向き合い方を問い続けるべき局面であることに変わりはない。

⑷ 今後の研究への課題

震災発生から10年あまりが過ぎ、震災報道にとって「3月」の持つ意味がわずかに変わりつつある。3月以外は震災がメディアで取り上げられなくなり、さらには被災者・被災地そのものが語られなくなっていくことへ注意を向けていくべきであろう。

今回の分析であらためて、震災関連ドキュメンタリーの減少傾向が確認された。この傾向が続くのであれば、今後は違うアプローチからも精密な観察が必要となっていくのではないか。ドキュメンタリー番組だけでなく、毎年3月11日に放送されるニュース・情報番組・特番などについて、その内容や扱われる項目を分析し、より詳細に、震災報道の傾向を探っていくことが必要になる。そのことが、「東日本大震災を忘れない」「震災の教訓を次世代に伝える」ということにつながっていくことになる。

謝辞：

本論文は、放送文化基金の助成（2021年度）を受けた研究「映像アーカイブを用いた震災関連報道10年の時系列分析」の研究成果である。

注：

（1） 分析にはエム・データ社の「TV メタデータ」を使用、「東日本大震災」「3.11」「復興「福島第一」「東京電力」のいずれかの言葉が入ったニュースや特集などの放送時間を調べた。

（2） 『NHK スペシャル』207本、『クローズアップ現代』160本（2016年4月から『クローズアップ現代＋』）（以上、NHK）、『NNN ドキュメント』114本（日本テレビ系列）、『テレメンタリー』130本（テレビ朝日系列）、『報道の魂』『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』55本（2017年4月から『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』）（以上、TBS 系列）の5番組について、各番組の公式 HP から震災をテーマにした番組を抽出してカウントした。これらドキュメンタリー番組は、東日本大震災の発生当時から現在に至るまで、内容のリニューアルや放送時間の変更などはあっても番組枠が継続して存在し、最近に至るまで震災関連の番組が放送されていることが確認されている。また、これらの場組は公式 WEB サイトに放送記録や番組概要が残されているため、これら番組公式 WEB サイトに記載されている内容をもとに震災関連番

組かどうかの判定を行い、本数を計上した。

（3）　2016年は5番組ともわずかに前年の本数を上回っているが、これは、2016年3月が震災5年の節目の年であったこと、また、2016年4月に震度7の熊本地震が発生し、関連した放送が増えたことが影響している。

（4）　例外として、『NHKスペシャル　THE NEXT MEGAQUAKE 巨大地震大変動期最悪のシナリオに備えろ』が2013年3月28日に放送されているが、テレビ局の編成では、事実上の新年度（4月以降）の扱いである。

（5）　各番組の公式HPから震災をテーマにした番組を抽出してカウントした。

（6）　コーディングと分類作業はプロジェクトの複数のメンバーによって行った。

（7）　東日本大震災の被害状況や被災者・被災地を直接取り上げていない番組で、なおかつ小分類（1）から（6）に該当しないものを（7）「その他」とした。「次に来る災害」とは関連性が薄いため、分析対象からはずした。

（8）『NHKスペシャル　震災ビッグデータ』（NHK）シリーズは2015年のFile.4まで放送された。

（9）　兵庫県立舞子高校環境防災科については、『報道の魂　未来を守りたい～舞子高校環境防災科の生徒たち』（2015年3月1日）でも取り上げられている。

文献

NHK　災害列島・命を守る情報サイト

NHK　原発特設サイト「東電福島第一原発事故　日本の原子力政策」

小田貞夫（2003）「災害放送史―災害放送は「報道」と「防災」の課題にどう応えてきたか―」「集中講座報告：災害放送担当者のための集中講座」『東京大学社会情報研究所紀要第65号』

熊谷百合子（2022）「東日本大震災から11年、放送はどう伝えたか」『放送研究と調査』5月号

小林利行・中山準之助・河野啓「世論調査にみる震災10年の人々の意識～「東日本大震災から10年　復興に関する意識調査」の結果から～」『放送研究と調査』7月号

日本大学法学部新聞学研究所（2021）　シンポジウム「震災10年、テレビ報道は震災をどう伝えてきたか」パネルディスカッション

丹羽美之・藤田真文（2013）「メディアが震えた　テレビ・ラジオと東日本大震災」東京大学出版会

原由美子（2015）「震災後3年間　テレビ番組で何が伝えられてきたのか　ドキュメンタリー番組で描かれた被災者、被災地」『文研年報2015』Vol.59

原由美子（2017）「東日本大震災から5年　テレビ番組は何を伝えてきたか　夜のニュース番組とドキュメンタリー番組」『文研年報2017』Vol.61

原由美子・大髙崇（2019）「3.11はいかに語り継がれるか―東日本大震災後7年・テレビ報道の検証―」『NHK放送文化研究所年報2019』

古澤健・米倉律（2022）「震災関連ドキュメンタリーの10年―被災地・被災者の表象とテーマに関する内容分析を中心に―」『ジャーナリズム＆メディア』第17・18号

米倉律（2016）「地域メディアが伝える震災と復興―東日本大震災の被災地で活躍するジャーナリスト達の5年―」『日本オーラル・ヒストリー研究』第12号

付表　NHK・民放の震災関連ドキュメンタリーに占める「次に来る災害」に属する番組

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2011	8	21	新エネルギー覇権争奪戦 ～日本企業の闘い～	自然エネルギーを導入した省エネ都市「スマートシティ」。震災後、日本や新興国を舞台に国内外の企業がシステム作りを競っている。エネルギービジネスの最前線からの報告。 東日本大震災を境に、風力発電や太陽光発電など「再生可能エネルギー」の導入が、がぜん注目されている。なかでも加速しているのが、企業の水面下の動きだ。国内・国外の企業が、日本や新興国を舞台に「スマートシティ」と呼ばれる省エネ未来都市のシステム作りを競っている。日米韓の企業の最前線を取材し、環境ビジネスの新たな潮流を追う。	⑤
2011	8	25	シリーズ日本新生 第1回　どう選ぶ？ わたしたちのエネルギー	福島第一原発の事故を受けて、私たちは必要なエネルギーをどう確保すべきかという問題に直面している。「日本新生」第1回は、エネルギー問題を通してこの国の未来を探る。 未曽有の大震災を経験した日本。私たちは今、これまでのシステムや考え方を、大きく変えていかなければならない局面に立たされている。復興を進め、新たに生まれ変わるために何が必要なのか。新シリーズ「日本新生」では、視聴者にその選択肢を示していく。第1回のテーマは、エネルギー。資源が無い日本で、私たちは必要な電力をどう確保していくのか。福島原発事故以降に直面しているエネルギー問題を通し、この国の未来を探る。	⑤
2011	8	27	シリーズ日本新生 市民討論　どう選ぶ？ わたしたちのエネルギー 第一部	多くの原発が運転を止め節電に追われる日本。今後原発はどうするのか。太陽光や風力など自然エネルギーはどこまで頼れるのか。有識者と市民が未来のエネルギーを徹底討論。 多くの原発が運転を停止し、節電に追われる日本。市民生活や企業の生産活動に大きな影響が出ているなか、今後、原発はどうするのか。代替エネルギー源として、期待がかかる太陽光や風力などの自然エネルギーは、どこまで頼れるのか。安全性・電力の安定供給・電力料金など、さまざまな課題について、有識者と市民が徹底討論。日本のこれからのエネルギーは、どうあるべきなのかを考える。	⑤
2011	8	27	シリーズ日本新生 市民討論　どう選ぶ？ わたしたちのエネルギー 第二部	多くの原発が運転を止め節電に追われる日本。今後原発はどうするのか。太陽光や風力など自然エネルギーはどこまで頼れるのか。有識者と市民が未来のエネルギーを徹底討論。 多くの原発が運転を停止し、節電に追われる日本。市民生活や企業の生産活動に大きな影響が出ているなか、今後、原発はどうするのか。代替エネルギー源として、期待がかかる太陽光や風力などの自然エネルギーは、どこまで頼れるのか。安全性・電力の安定供給・電力料金など、さまざまな課題について、有識者と市民が徹底討論。日本のこれからのエネルギーは、どうあるべきなのかを考える。	⑤

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2011	9	1	巨大津波が都市を襲う ～東海　東南海　南海地震～	東日本大震災をきっかけに、いま、東海・東南海・南海地震が同時に起こる3連動地震の被害想定や対策の見直しが課題となっている。最新の研究と各地の取り組みを伝える。 東日本大震災をきっかけに、国は、東海・東南海・南海地震が同時に起こる「3連動地震」の被害想定の見直しに乗りだしている。新たな研究から、津波を巨大化させるメカニズムが判明。専門家は、予測の2倍近くの津波が沿岸を襲うことや、これまで被害を想定していなかった都市にも津波が到達する可能性を指摘している。どうすれば命を守れるのか。今、私たちは何をすべきなのか。最新の研究と各地の取り組みを伝える。	②
2011	10	22	シリーズ日本新生 “食の安心”をどう取り戻すか ―第一部―	放射性物質をより手軽で精密に検査できる新技術、産地と消費者が直接つながり流通を変える取り組みなど震災後、各地で広がり始めた「食の安心」を巡る新しい潮流を紹介する。 原発事故の放射能汚染で、脅かされる私たちの食卓。「食の安心・安全」を取り戻すには今、何が必要なのか。急ピッチで進む、放射性物質をより手軽で精密に検査できる技術開発など「安全」を確保しようという動きや、ネットを活用し産地と消費者が直接つながることで信頼感が生まれ、「安心感」をもたらそうという取り組みなどを紹介。震災後、被災地を中心に始まった「食の安心・安全」を巡る新しい潮流を紹介し、可能性を考える。	⑤
2011	10	22	シリーズ日本新生 “食の安心”をどう取り戻すか ―第二部　市民討論―	原発事故の影響で、改めて問い直される食の安心・安全。どうすれば放射能の不安を取り除くことができるのか、幼い子どもを持つ母親、被災地の生産者などが徹底討論する。 市民が食品を持ち込み、放射性物質の有無や量を測定してもらえる施設や、食品の値札に「ベクレル表示」をする店舗も登場した。原発事故の影響で、食の安心・安全が、改めて問い直されている。放射能の不安をどう取り除くのか。将来にわたって、どんな仕組みを築いていくべきか。食の安心・安全を確かなものにするための方法を、幼い子どもを持つ母親、被災地の生産者、流通業界の代表、放射線や食の専門家などが、徹底討論する。	⑤
2012	1	17	阪神・淡路大震災17年 東北復興を支えたい ～“後悔”を胸に～	今、東日本大震災の被災地に、阪神大震災の復興に関わった人たちが、その時できなかった「後悔」の思いを胸に支援に入っている。その姿から、まちの復興で大切なことを探る 。 阪神・淡路大震災から17年。今、東日本大震災の被災地に、行政職員・商店主・建築の専門家など、阪神大震災の復興に関わった人が支援に入っている。彼らを突き動かす原動力は「行政と住民の間で信頼関係が築けなかった」「素早い復興を成し遂げられなかった」「地域のコミュニティーを守れなかった」など、阪神大震災の復興での“後悔”の思い。阪神大震災の教訓は東北の被災地で通用するのか。まちの復興で大切な事は何か探る。	⑥

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2012	4	1	MEGAQUAKE Ⅱ 巨大地震 第1回 いま日本の地下で何が起きているのか	マグニチュード9の巨大地震はなぜ起きたのか、各地で捉えられた膨大なデータから巨大化の謎を解き明す。未知の状況に入った日本でこの先、何が起きるのか最新科学で迫る。 地震研究先進国・日本を襲った巨大地震。科学者たちは深い悔恨を抱きながらも、次に備える新たな挑戦を始めている。その手がかりは、世界でも類を見ない観測網が捉えていた膨大なデータにある。解析が進むにつれ、知られざる巨大地震の発生メカニズムが浮かび上がりつつある。地震はなぜ巨大化したのか、番組では詳細なデータをもとにCGで完全再現。世界で進む予測研究の最前線に密着し、各地に潜む巨大地震の脅威に迫っていく。	①
2012	4	8	MEGAQUAKE Ⅱ 巨大地震 第2回 津波はどこまで巨大化するのか	メガクエイクⅡの第2回。なぜ想定を大きく超えた巨大な津波が東日本大震災で発生したのか？津波増幅のメカニズムを解明。将来に迫る巨大津波の恐るべき実像を描き出す。 「メガクエイクⅡ」の第2回。なぜ想定をはるかに超える巨大な津波が、東日本大震災で発生したのか？膨大なデータから津波巨大化の謎に迫る。明らかになってきたのは、複雑に連動していくことで、津波がどこまでも増幅していく未知のメカニズムだった。さらに最新の研究結果から、将来日本を襲う津波被害をシミュレーション。これまで津波の深刻な被害は起きないとされていた大都市圏を襲う「最悪のシナリオ」を詳細に描きだす。	①
2012	5	19	東日本大震災 原発の安全とは何か ～模索する世界と日本～	世界に衝撃を与えた東京電力・福島第一原発事故。事故を世界はどう受け止め、どんな安全対策を行っているのか。日本はどうか？世界の最新動向を伝え、日本の進む道を探る。 東電・福島第一原発事故の後、世界各国で原発の安全をどう確保するか、議論が続いている。「原発推進」を掲げるアメリカでは、NRC・原子力規制委員会が事故を検証。どこまで安全対策を強化するか、公開の場で議論を闘わせている。スイスは、事故後すぐに数々の安全対策を強化しながら、脱原発を決めた。一方、日本では、政府が新たな安全基準を決定し原発の運転再開を目指しているが、進め方や安全性に疑問の声もあがっている。	⑤
2012	6	9	MEGAQUAKE Ⅱ 巨大地震 第3回 “大変動期”最悪のシナリオに備えろ	首都圏で多発する地震や火山で見られる異変…。科学者の間で、今、日本は“大変動期”に入ったのではないかと危惧されている。最新の科学が捉える、最悪のシナリオに迫る。 あの巨大地震から1年余り。今、日本は地震や火山噴火が多発する“大変動期”に入ったのではないかと、科学者たちは懸念している。それまで東北沖が中心だった地震が、首都圏周辺で多発。大きな地震も連続している。さらに20を超える火山では、火山ガスが新たに噴出したり、地熱が高まるなどの異変が確認され、富士山も噴火の可能性が指摘され始めた。膨大なデータと最新の研究を映像化し、科学が描きだす最悪のシナリオに迫る。	①

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2012	7	14	激論！ニッポンのエネルギー	原発事故を受け、見直されることになった「エネルギー基本計画」。今後のエネルギーをどう確保していくのか、様々な視点からのゲストの生討論を通して、問題の本質を探る。 原発事故を受け、見直されることになった「エネルギー基本計画」。これからの日本が、エネルギーをどう確保していくべきなのか、議論が大詰めを迎えている。原発という選択肢を完全に捨てて良いのか？再生可能エネルギーはどこまで広がるのか？コスト増にどこまで耐えられるのか？など、専門家の間でも意見が大きく割れているこの問題。私たちにはどのような選択肢があるのか、さまざまな視点からのゲストの生討論を通して考える。	⑤
2012	9	1	シリーズ日本新生 “死者32万人”の衝撃 巨大地震から命をどう守るのか	いま全国各地で、巨大地震・津波の新たな被害想定が相次いでいる。こうした中、どうすれば命を守ることができるのか？専門家や自治体の防災担当者などの議論を通じて探る。 いま全国各地で、巨大地震・津波の新たな被害想定が相次いでいる。背景にあるのが、国の防災対策の大転換。東日本大震災への反省から、“考えられる最大の被害”を公表し、避難を通じて1人でも多くの人命を守る方向に舵（かじ）を切ったのだ。地震の活動期に入り、いつどこで巨大地震が起きてもおかしくないとされる日本。スタジオに集まった専門家や、自治体の防災担当者などの議論を通じて、命をどう守っていくのかを探る。	②
2012	9	2	崩れる大地 日本列島を襲う豪雨と地震	いま日本列島の大地は、かつてない規模で崩れ始めている。異常な大雨と活発化する地震活動が、山を次々と崩壊させている。深刻化する土砂災害の脅威を検証し課題に迫る。 日本列島を襲う豪雨と地震。日本の大地は、かつてない大規模な土砂災害の危機に直面している。今年の夏、九州を襲った集中豪雨は、各地の山の斜面を至る所で崩壊させた。昨年9月の紀伊半島豪雨では、大規模な山の崩壊で大量の土砂が村を襲い、甚大な被害を出した。昨年3月11日の巨大地震では、400か所以上の山で崩壊が発生。その後も活発化する地震活動は山を崩し続けている。土砂災害の脅威からどう命を守るのか検証する。	①
2013	1	17	阪神・淡路大震災18年 大都市被災　その時日本は	大都市を同時に襲う南海トラフ巨大地震。全国的に物資が不足する最悪のシナリオで、どう生き延びるか。18年前の災害でパニックを回避した神戸の経験から考える。 大阪・神戸・名古屋など大都市が同時に被災する南海トラフ巨大地震。最悪の場合、避難者は500万に上り、物資が全国的に枯渇。交通網や通信網が断たれると影響は深刻に…。いま企業は備えとして阪神大震災の教訓に活路を見いだそうとしている。銀行のオンラインシステムが寸断される中、パニックをどう回避したのか。専門家による“最悪のシナリオ”を基に、18年前の神戸の経験から何をくみ取り、減災につなげるのかを考える。	②

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2013	2	10	“核のゴミ”はどこへ ～検証・使用済み核燃料～	全国の原発等に貯蔵される使用済み核燃料は1万7千トン。福島での原発事故は、その処理のあり方に改めて再考を迫った。この重い課題に社会はどう向き合うべきなのか探る。 全国の原子力発電所などに貯蔵される使用済み核燃料は1万7000トン。福島での原発事故で、その危険性が改めて明らかになった。その中で、トラブルによって操業開始の延期が繰り返されてきた再処理の問題や、最終処分場の問題が、改めてクローズアップされている。原発を動かしても、動かさなくても、もはや避けることができない使用済み核燃料の処理。この重い課題に、社会はどう向き合うべきなのかを考える。	⑤
2013	2	16	シリーズ日本新生 どうするエネルギー政策	いま、日本のエネルギー政策が問われている。原発の再稼働は？燃料費が急増する火力発電は？再生可能エネルギーは？どのようなエネルギー構成を目指すのか、徹底討論する。 いま、日本のエネルギー政策が問われている。当面の焦点は運転を停止したままの原発の再稼働だ。国の原子力規制委員会は1月、新たな安全基準の骨子案を公表した。一方、原発の停止によってフル稼働する火力発電の燃料費は、震災前と比べ年間3兆円余り増加。再生可能エネルギーは、固定価格買取制度を追い風に伸びているが、発電量に占める割合は約3％にすぎない。どのようなエネルギー構成を目指すのか、生放送で徹底討論する。	⑤
2013	3	3	“いのちの記録”を未来へ ～震災ビッグデータ～	18000人もの犠牲者を出した東日本大震災。今、記録されていた膨大な電子情報「震災ビッグデータ」を使って被害を検証し、未来の防災につなげる動きが広がっている。 東日本大震災から2年。カーナビのGPS情報や、ツイッターに投稿されたつぶやきなど、“あの日”に記録された膨大な電子情報「震災ビッグデータ」を利用し、被害の実態を検証する試みが始まっている。ビッグデータを通して見えてくるのは、津波到達時になぜか危険地域に入る人の動きや、避難不可能な超渋滞現象など、これまで明らかにされてこなかった大震災の実像。震災ビッグデータ＝「いのちの記録」を、未来につなげていく。	③
2013	3	28	THE NEXT MEGAQUAKE 巨大地震 “大変動期”最悪のシナリオに備えろ	活発化する断層地震と火山活動。科学者は、次の巨大地震や巨大津波、富士山などの噴火を危惧し始めている。世界で進むGPSデータなどの解析結果から大変動期の姿を描く。 巨大地震の直後から活発化し始めた断層地震と火山活動。急速に進む過去の地震や津波の調査から、いま、巨大地震が連鎖する活動期に突入したのではないかという可能性が浮かび上がってきた。この先、何が起きるのか。研究者たちは、次の巨大地震や大津波、富士山などの火山が噴火する最悪のシナリオを描き始めている。世界各地で進み始めたGPSデータを駆使した次の巨大地震を予測する研究から大変動期の姿を描きだす。	①

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2013	4	4	THE NEXT MEGAQUAKE 巨大地震 3.11　巨大地震 明らかになる地殻変動	3.11の巨大地震と大津波は、世界で初めて非常に多数の観測機器でその全貌を知るデータが捉えられ、その解析から知られざる発生メカニズムが次々と明らかになってきた。 地震発生の数日前から海底と上空で起きていた数々の異変、想定外のプレート境界のずれがアスペリティー破壊の連鎖を引き起こし地震を巨大化させていったプロセス、海底の時間差変動がもたらしていた津波の巨大化。番組では、解析結果から明かになった地下のドラマをCGで完全再現。さらに、巨大地震がメキシコなど世界各地で地震を誘発させ、大津波がチリや南極にまで到達し被害をもたらしていた実態など、地球規模で起きていた知られざる地殻変動の真相を解き明かす。	①
2013	4	7	MEGAQUAKE Ⅲ 巨大地震 第1回 次の直下地震はどこか ～知られざる活断層の真実～	最新科学で地下に潜む地震の謎を解き明かす、MEGAQUAKEシリーズ第3弾。震災以降、日本列島全体で高まる、内陸の直下地震の脅威。知られざる活断層の真実に迫る。 最新科学で地下に潜む地震の謎を解き明かす、MEGAQUAKEシリーズ第3弾。東日本大震災以降、日本列島全体で、直下地震の脅威が高まっている。地下の活断層が動けば、その上にある都市を襲い、壊滅的な被害をもたらすのだ。今、科学者たちは、地下に潜む活断層のメカニズムを探る研究を加速させ、次に起きる地震の正体に迫ろうとしている。番組では、詳細なCGを駆使して、活断層が引き起こす直下地震の脅威に迫っていく。	①
2013	4	14	MEGAQUAKE Ⅲ 巨大地震 第2回 揺れが止まらない ～“長時間地震動”の衝撃～	東日本大震災の膨大なデータから、強い揺れが、数分間以上にわたって続く“長時間地震動”の脅威が浮かび上がった。揺れはどこまで大きくなるのか、その可能性に迫る。 東日本大震災から2年。“あの日”記録された膨大なデータから、巨大地震が引き起こした恐るべき「揺れ」の実態が浮かび上がってきた。強い揺れが数分間以上にわたって続く“長時間地震動”が、耐震補強した建物までを破壊。さらに震源から遠く離れた東京や大阪で、超高層ビルが10分間以上にわたり、ゆっくりと揺さぶられたメカニズムも明らかになった。私たちを襲う揺れはどこまで大きくなるのか。巨大地震の新たな脅威に迫る。	①

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2013	6	2	密着 エネルギー争奪戦 ～日本の逆襲～	世界で最も高い天然ガスを輸入する日本。シェール革命を機に圧倒的に安いガスが出現し、世界のエネルギー地図が激変する中、日本が命運をかけて挑むガス争奪戦に密着した。 福島第一原発事故以降、火力発電所がフル稼働する日本。天然ガスを世界で最も高い価格で購入し、それが、年間8兆円を超える貿易赤字の主因となっている。一方、“シェール革命”により圧倒的に安いガスが出現したことで、世界のエネルギー地図は激変。この混乱のなか、高値づかみの現状から脱しようと日本は反転攻勢に出た。アメリカ、ロシア、そして世界を相手に繰り広げられる、日本の命運をかけたエネルギー争奪戦に密着した。	⑤
2013	8	31	MEGAQUAKE Ⅲ 巨大地震 よみがえる関東大震災 ～首都壊滅・90年目の警告～	90年前、10万5千人の命を奪った巨大地震・関東大震災。揺れと被害を最新の科学で検証し、ドラマやCGを駆使しながら「あの日」を再現。未来のリスクを明らかにする。 1923年9月1日、首都圏を襲った巨大地震・関東大震災。10万5000人の命が奪われた。あの日、どんな揺れが襲い、どのようにして多くの命が奪われたのか。最新の科学的知見や、未整理のまま残されている膨大な映像資料、存命する被災者の証言を検証。ドラマやCGを駆使しながら「あの日」を再現する。もし今、関東大震災と同じ“プレート境界型地震”が首都圏を襲えば、壊滅的な被害が出る可能性が浮かび上がる。	③
2013	9	1	MEGAQUAKE Ⅲ 巨大地震 南海トラフ 見え始めた“予兆”	M9の巨大地震が想定される南海トラフで、いま、人が身体に感じない謎の揺れ「スロー・クエイク」が観測されている。巨大地震の予兆の可能性が指摘されるこの揺れに迫る。 M9の巨大地震が想定される南海トラフで、今、人が感じられない小さな謎の揺れが観測されている。「スロー・クエイク」と呼ばれ、実は東北沖で起きた巨大地震の発生前に、1か月以上続いていた事が最近の研究で明らかになった。巨大地震の予兆ではないかと警戒が強まっている。メガクエイクⅢの第4回は、最新の科学で浮かび上がる南海トラフの“サイン”を手がかりに、巨大地震の謎を解明しようと挑戦を続ける科学者たちを追う。	①
2013	10	7	原発テロ～日本が直面する新たなリスク～	福島の事故後、世界は「電源を断たれるだけで原発テロが起こされる」と危機感を強める。日本はどこまで「原発テロ」対策を行うべきか、転換点にある。最前線の現場を見る。 福島の事故後、世界は「電源を断たれるだけで原発テロが起こされる」と危機感を強める。警備の強化、内通者を防ぐ身元調査の徹底、テロが起きる前提で放射能汚染下に投入する部隊の養成も始めた。日本も警備部隊を強化、身元調査導入の検討を始めた。一方、警備にあたる隊員の被ばくや国民への情報公開の問題も浮かび上がる。原子力の平和利用を掲げてきた日本は、「原発テロ」対策をどこまで行うべきなのか、現場からの報告。	⑤

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2013	11	29	東日本大震災　震災遺構 ～悲劇の教訓をどう伝えるか～	震災の記憶を後世に伝える「震災遺構」が次々になくなっている。保存か解体か議論が続く中、今月、国が支援の方針を打ち出した。葛藤を続ける被災地の人々の今を見つめる。 津波のすさまじさを後世に伝える「震災遺構」が、被災地で次々に失われている。保存か解体か。大きな議論になる中、今月、国も支援の方針を打ち出した。震災の教訓を伝える意味、慰霊の場としての意味などを持ち、簡単には結論が出せない遺構。残された家族からは保存を求める声もあがっており、広島の原爆ドームの経験を学ぶ住民たちも出ている。震災の教訓をどう伝えるのか、思い悩みながら葛藤を続ける被災地の今を見つめる。	④
2014	1	17	阪神・淡路大震災19年 救助が来ない 巨大地震その時あなたは	巨大地震の想定が次々と公表され、公的救助の限界がより明らかになった。一人でも多くの命を救うため、巨大災害に立ち向かうことを迫られた人々の取り組みと課題を追う。 南海トラフ地震や首都直下地震の想定が公表され、巨大災害が起きた時の公的救助の限界がより明らかになった。一人でも多くの命を救うため、市民のさまざまな取り組みが始まっている。神戸では住民が消防に頼らず、独力で地域の人々を救う訓練を繰り返している。静岡では住民自らが負傷者の重症度を判別し、医療機関に搬送する“トリアージ”を模索している。巨大地震に立ち向かうことを迫られた、人々の取り組みと課題を追う。	②
2014	3	2	震災ビッグデータ File.3 “首都パニック”を回避せよ	3年前の東日本大震災の際、首都圏では膨大なビッグデータが残された。今、そのビッグデータから教訓を導き出し、きたる首都直下地震にいかそうという動きが広がっている。 東日本大震災の際、首都圏の大混乱を克明にとらえたビッグデータが残された。携帯電話の位置情報を解析し、浮かび上がる「異常密集」。毎時4万 km の走行記録から読み解く「大渋滞の謎」。最悪の場合2万3000人の死者が想定される首都直下地震に、東日本大震災の教訓を生かそうという動きが、今、広がっている。私たちはその時までに、そしてその時、何が出来るのか。「震災ビッグデータ」から「新たな防災」の形を導き出す。	③
2014	9	20	巨大災害 MEGA DISASTER 地球大変動の衝撃 第3集 「巨大地震　見えてきた脅威のメカニズム」	東北沖の巨大地震から3年半。発生の謎が、地下構造の解析や海底の調査から急速に解明されている。地球内部の大循環の仕組みから、巨大地震のメカニズムに迫る。 司会タモリ 地球内部の膨大なエネルギーが生み出す巨大地震。科学者たちは、地下の構造を可視化する最新の技術で発生の謎を急速に解き明かしている。東北沖の震源近くのプレート境界では巨大な起伏構造が見つかり、海底付近の海水からは巨大地震の最後の引き金を引いたと考えられる物質が発見されている。巨大地震の発生メカニズムをチリやアメリカの最新研究も交えて紹介、さらに発生が危惧される南海トラフ巨大地震の脅威を見つめていく。	①

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2015	1	17	シリーズ 阪神・淡路大震災20年 第1回 大都市再生　20年の模索	都市が一瞬にして崩壊した阪神・淡路大震災。住まいをどう確保するのか、いかに都市を再生させるのか、判断を迫られたのが神戸の行政担当者だった。20年の模索を追う。 都市が一瞬にして崩壊した阪神・淡路大震災。住まいをどう確保するのか、いかに都市を再生させるのか、闘いの最前線に立ったのが、神戸の行政担当者たちだった。そして“奇跡の復興”を果たしたとされる神戸。しかし、にぎわいが戻らない商店街もあり、空き地も点在。今も復興事業は終わっていない。行政担当者の模索から、何を学び、次の災害にどう生かすのか。被災地復興の20年を見つめる。	⑥
2015	1	18	シリーズ 阪神・淡路大震災20年 第2回 都市直下地震　20年目の警告	相次ぐ想定外の大地震、超高層ビルに倒壊のおそれも？ 阪神・淡路大震災から20年。地震研究の最前線を追い、次の大地震に私たちはどう備えたらいいのか、考える。 阪神・淡路大震災をきっかけに、大地震のリスクを予測しようとしてきた科学者たち。各地の危険性の高い活断層を調査し、注意を呼びかけてきた。しかし想定外の地震が相次ぎ、次の大地震がいつ、どこでおきてもおかしくない状況だ。さらに、最新の研究からは、都市に急増する超高層ビルにもリスクがあることがわかってきた。 都市が一瞬で崩壊したあの日から20年、私たちはどう備えていけばいいのか？ 20年目の警告とは？	③
2015	3	10	震災ビッグデータ File.4 いのちの防災地図～巨大災害から生き延びるために～	巨大災害から生き残るための教訓を探る「震災ビッグデータ」。東日本大震災の時、47万人が強いられ亡くなる人もいた避難生活の全貌をさまざまなビッグデータから検証する。 巨大災害から生き残るための教訓を探るシリーズ「震災ビッグデータ」。東日本大震災のさい避難生活を強いられた人は47万人。生活に必要な物資が不足する中で命を落とした人も少なくない。今回、NHK は避難生活にまつわるさまざまなビッグデータを入手し、その全貌の解明を試みた。物流が断絶した知られざる原因、人々が求めた意外なもの、そして次の巨大災害の時どのように避難先を確保すればよいのか、新たな知見が見えてきた。	③
2015	9	6	巨大災害 MEGA DISASTER Ⅱ 日本に迫る脅威 第2集 大避難 ～命をつなぐシナリオ～	現実のものとなりつつある巨大災害の脅威にどう立ち向かえばいいのか。「避難」を科学的に分析する重要性が指摘されている。命をつなぐ“大避難”のシナリオに迫る。 特に急がれるのが、大都市を直撃した場合、膨大な数の住民避難が必要となる「スーパー台風」、そして、短時間で大津波が襲う「南海トラフ巨大地震」だ。かつてない数百万人規模の避難＝“大避難”が、迅速に実現できなければ、多くの命が奪われるおそれがある。住民一人一人の避難行動を分析する「エージェントシミュレーション」と呼ばれる解析技術を使って、科学者たちが都市全体の避難を検証していく。	②

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2016	1	17	震度7 何が生死を分けたのか ～埋もれたデータ 21年目の真実	6434人が犠牲になった阪神・淡路大震災。「生と死」に関する膨大なデータを分析すると、何が命を奪ったのか、その真の姿が明らかに。大地震からどう命を守るか考える。 21年前、被災直後に集められた「生と死」に関するデータ。死の原因、家屋の倒壊状況、火災の広がり方、救助の動き…。数十万件におよぶデータはさまざまな教訓を導き出した一方で、必ずしも十分な分析を受けないまま残されてきた。これらを最新の「データビジュアライゼーション技術」で、時間経過も組み合わせて分析すると、都市直下地震がどのように命を奪うのか、その知られざる姿、そして残されたままの課題が見えてきた。	③
2016	4	3	巨大災害 MEGA DISASTER Ⅱ 日本に迫る脅威 地震列島 見えてきた新たなリスク	地震学の“常識”をくつがえす発見が加速している。巨大地震によって日本列島の地下のバランスがくずれ、各地で地震リスクが高まっているのだ。地下で何が起きているのか。 巨大地震から5年、地震学の“常識”をくつがえすような新たな脅威の可能性が次々と浮かび上がっている。地下深くのマントルによって、大地の隆起や海底の複雑な動きが引き起こされ、大地震につながることが危惧されている。さらに、日本列島がのる巨大な岩盤・プレートが複数のブロックに分かれ、その裂け目で大規模な地震が起きるリスクも指摘されている。いま日本の地下で何が起きているのか、地震研究の最前線に迫る。	①
2016	4	16	緊急報告 熊本地震　活断層の脅威	熊本からの緊急報告。今なお続く余震活動は何を意味するのか？また今回の活断層にどのような影響を与えるのか。活断層の脅威・多発する余震の謎とそのメカニズムに迫る。 震度7の地震と余震が相次ぐ熊本県。被害は広域にと拡がり、死者も増加。けが人は1000人以上に上る。専門家はこの地域に存在する活断層の一部がずれ動いて地震が起きた可能性があるとみているが、異例なほど“余震”活動が活発で、その発生メカニズムにはまだ謎が多い。命が失われる被害はどのようにして引き起こされたのか。今なお続く“余震”活動は活断層にどのような影響を与えるのか。現地での緊急取材から報告する。	⑥
2016	4	23	“連鎖”大地震 緊迫の10日 いのちを守るために	熊本・大分を連鎖的に襲った大地震から10日。異例の回数で続く地震が、建物やインフラにダメージを与え、人・モノの支援も滞っている。今何が求められているのか考える。 熊本・大分を連鎖的に襲った大地震から10日。激震をくぐり抜け助かった命を、どうすれば守れるのか。被災地は、かつてないリスクにさらされ続けている。“異例”の回数で続く地震が、建物やインフラにダメージを与え続け、人・モノの支援も滞る事態を生じさせている。さらに、ストレス性の疾患を発症する人が急増。激震を生き延びた人々がエコノミークラス症候群などで亡くなっている。今求められる支援のあり方について考える。	⑥

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2016	5	14	最新報告“連鎖”大地震 終わらない危機	熊本地震から1か月、活発な地震活動が続く被災地で、新たな事実が浮かび上がっている。被害の全貌を新たなデータから“面的”に検証、最前線のルポを交えて伝える。 熊本地震から1か月、2度の震度7の激震以降も続く活発な地震活動が、被災地に何をもたらしているのか、新たな事実が浮かび上がっている。余震への恐怖から今も車中泊を続ける人が後を絶たず、関連死のリスクが高まっているのだ。一見無傷の家屋が被害を受けているケースもあるなど、被害の全貌がつかめず、復興への道のりも遅れている。番組では、新たなデータをもとに地震被害を“面的”に検証、最前線のルポを交えて伝える。	⑥
2016	9	11	MEGA CRISIS　巨大危機 ～脅威と闘う者たち～ 第2集　地震予測に挑む ～次はいつ　どこで起きるのか～	熊本地震以降、全国各地で相次ぐ地震。日本はいよいよ地震活動期に入ったのか？次の大地震を予測する研究者たちの挑戦が、いま新たな展開を見せている。その最前線に迫る。 地震、異常気象、ウイルス感染…日本を襲うさまざまな巨大危機との闘いの最前線に迫るシリーズ。第2集は、巨大地震との闘い。東日本大震災、熊本地震と、相次いで「想定外」の地震に襲われる中、次の大地震が「いつどこで起きるか」を予測する研究が新たな成果を挙げつつある。次の地震を引き起こす「火種」の発見。南海トラフ・M9の巨大地震の前兆を捉える国家プロジェクト。究極の「地震予報」の実現に向けた挑戦を描く。	②
2016	10	9	あなたの家が危ない ～熊本地震からの警告～	私たちの暮らしを支える家に「盲点」があった。4月の熊本地震では、最新の耐震基準を満たす木造住宅が次々倒壊した。マンションや高層ビルにも及ぶリスクを徹底検証する。 私たちの暮らしを支える住宅に「盲点」があった。4月の熊本地震で、最新の耐震基準を満たした木造住宅が倒壊、マンションも大きな被害を受けた。一体なぜか？取材を進めると、基準を満たしていても地震に弱い住宅が生まれる構図が見えてきた。さらに今回観測された新しいタイプの長周期地震動が、高層ビルに設置された免震装置に深刻な被害を及ぼすことも分かった。番組では、住宅に潜むリスクを徹底検証、課題を浮き彫りにする。	⑥
2016	10	16	活断層の村の苦闘 ～熊本地震・半年間の記録～	熊本地震によって地表に巨大な断層が出現した西原村。暮らしの再建が進まぬ中、住民は今、活断層の地で暮らし続けるかどうか、選択を迫られている。半年間の苦闘の記録。 熊本に震度7の直下型地震を起こした布田川断層帯。地表には巨大な地震断層が出現し、西原村では、全家屋の6割が損壊した。地震直後、がれきの中で立ち上がった住民たち。しかし活断層に切り裂かれた大地が、暮らしの再建を阻む。今、村の人々は、活断層の地で暮らし続けるかどうか、選択を迫られている。友人同士、家族同士も意見が分かれ揺れ動く。活断層は日本全国に2千以上。活断層の村、熊本地震から半年間の苦闘の記録。	⑥

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2017	1	17	女たちの大震災 ～最新医療が迫る　体と心のリスク～	阪神・淡路大震災から22年。最新の医学で、災害が今なお心身に影響を及ぼす女性特有のリスクがわかってきた。その実態に科学の視点で迫り、対策のヒントを探る取材報告。 災害が起きた時、女性の体と心に何が起きるのか。22年前の阪神・淡路大震災。当時残された被災者の記録を最新医学で分析すると、女性特有のリスクが浮かび上がってきた。震災後、脳卒中を発症する女性が急増。被災体験が女性の心に、より深刻な傷を与える仕組みも明らかになってきた。そのリスクは長年にわたって潜み、今なお心身をむしばみ続けている。災害列島・日本、女性が抱えるリスクに科学の視点で迫り対策のヒントを探る。	③
2017	1	22	MEGA CRISIS　巨大危機 ～脅威と闘う者たち～ 第4集 “地震大火災”があなたを襲う ～見えてきた最悪シナリオ～	次の巨大地震で、想定を超える“地震大火災”が日本を襲う！？最新シミュレーションで見えてきた、起こりうる「最悪のシナリオ」とは。その時あなたは生き延びられるのか？ 警戒される首都直下地震や南海トラフ巨大地震では、同時多発火災によって多数の死者が出ると想定されている。しかし最新研究から、その想定をはるかに超える「最悪のシナリオ」が明らかになってきた。東京では、避難場所に逃げる人が炎にまかれ、1か所で数百人以上が死傷。大阪では、湾岸の石油コンビナートから流出した大量の油が津波と共に都市に流れ込み、炎上する可能性も。命を守るため、過酷な地震火災に挑む最前線に迫る。	②
2017	4	9	大地震 あなたの家はどうなる？ ～見えてきた“地盤リスク”～	熊本地震から1年。最新の解析で、戸建てに影響を与える揺れを巨大なものに増幅する地盤リスクが見えてきた。首都圏でも解析が進む。最前線の対策と共に新たな脅威に迫る。 熊本地震から1年、最新の解析によって新たな“地盤リスク”が浮かび上がっている。熊本県益城町では、戸建てに影響を与える揺れが、深さ数十メートルまでの地盤で、巨大なものに増幅していた可能性が浮かび上がったのだ。首都圏では“地盤リスク”の解析が進められ、首都直下地震の被害想定の見直しにもつながる可能性もあると専門家は指摘する。最前線の対策とともに新たな脅威“地盤リスク”の姿に迫る。	⑥
2017	4	16	熊本城　再建 “サムライの英知”を未来へ	熊本城再建の舞台裏に密着！先人が築いた石垣の知られざる耐震性とは？最新科学と歴史検証でミステリーに迫る。サムライの英知が詰まった名城の再建に向けた1年間の苦闘。 去年4月の地震で甚大な被害を受けた「熊本城」に意外な事実が浮かび上がってきた。崩壊した文化的価値の高い「石垣」。築城当初に造られた石垣の多くが地震に耐えていたことがわかったのだ。先人はどうやって地震に強い城を築いたのか？最新科学と歴史検証でミステリーに迫る。一方“サムライの英知”を未来へつなぐ「再建」では耐震性と文化財的価値の両立を目指した模索が続く。地震から1年、熊本城再建の知られざる舞台裏！	⑥

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2017	9	2	MEGA CRISIS　巨大危機Ⅱ ～脅威と闘う者たち～ 第1集　都市直下地震　新たな脅威“長周期パルス”の衝撃	超高層ビルなどにリスクとなる特殊な揺れが、熊本地震で発生していた。大揺れが一撃で襲う“長周期パルス”だ。都市の高層化が進む中、出現した新たな脅威との闘いに迫る。 超高層ビルや免震構造を取り入れた建物に、リスクとなる特殊な揺れが、去年4月の熊本地震で発生していた。脈打つような大揺れが一撃で襲う“長周期パルス”だ。活断層地震では国内で初めて確認され、新たな対策の研究が始まっている。街全体を宙に浮かせて、揺れを遮断しようという計画、従来の対策の弱点を克服しようという最新の装置。都市の高層化が進む中で新たな脅威として出現した“長周期パルス”との闘いに迫る。	①
2018	1	17	遺児たちのいま 阪神・淡路大震災23年	阪神・淡路大震災で400人以上の子供が親を亡くし、遺児となった。あれから23年、成人した自らの役割を問いながら、現在を生きる遺児たちの姿を追った。 6434人が亡くなった阪神・淡路大震災。0歳から高校生まで、400人以上の子どもが親を失い、遺児となった。四半世紀に近い歳月の間に、遺児の多くは亡くした親の年齢に達し、子どもをもつ人も少なくない。震災後から定期的に成長を記録してきた遺児たちを再訪すると、成人して新たな役割に気づきながら歩む、それぞれの人生があった。震災から23年、遺児たちの「心に秘めた苦悩」と「生きていく覚悟」とは…。	⑥
2018	9	1	MEGAQUAKE 南海トラフ巨大地震 迫りくる“Ｘデー”に備えろ	東日本大震災をも上回る被害が想定される「南海トラフ巨大地震」。そのＸデーがより一層切迫している可能性が明らかに。そのとき命を守るための重要な鍵を最新科学で探る。 「国難」とも警戒される巨大地震が、いま日本に迫っている。マグニチュード9の南海トラフ地震だ。最新研究によって、そのＸデーの到来を切迫させる不気味な現象が、海底のはるか下で発見された。いざ巨大地震発生の可能性が高まった場合、国は「臨時情報」を発して事前の備えや警戒を促すという新たな制度も打ち出した。そのとき何が起きるのか。大規模アンケートに基づくシミュレーションドラマでリアルに描き出す。	②
2018	9	9	緊急報告　北海道激震	6日未明北海道の胆振地方で震度7の激しい揺れを観測する地震が発生した。大規模な土砂崩れが起き今も多くの方の安否が分かっていない。被害実態や現地の最新状況を伝える。 6日未明、北海道の胆振地方で震度7の激しい揺れを観測する地震が発生した。大規模な土砂崩れが発生。多くの方の安否が今も分かっておらず、懸命の捜索が続いている。また地震によって、北海道全域で停電が起こるなど、人々の生活に大きな影響がでている。番組では、震度7が発生したメカニズムを分析。大雨が続いた後で、発生した地震が、複合し被害を拡大させていった実態を報告。停電の影響などの最新情報を伝える。	⑥

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2019	1	17	命をめぐる決断 ～災害多発時代　神戸からの問いかけ～	“災害多発時代”。いま各地の消防で、助ける人に「優先順位」をつける動きが広がっている。その原点は24年前の阪神・淡路大震災。あと一人多く救うため何が必要か考える 。 “災害多発時代”。いま各地の消防で、助ける人に「優先順位」をつける動きが広がっている。その原点は24年前の阪神・淡路大震災。発災直後、神戸市の消防に救助要請が殺到。独自に入手した活動記録や証言から、生存の可能性が高い現場を優先した隊員ほど多くの命を救っていたことが分かった。一方で、市民の理解をどう得るかという課題も。一人でも多くの命を救うため、SNSや人工知能を救助活動にいかす取り組みも始まった。	③
2019	12	1	シリーズ　体感 首都直下地震 プロローグ あなたは生きのびられるか	30年以内に70％の確率で発生するとされる首都直下地震。命と暮らしを守るために、いま何ができるのか。みんなで防災を考える体感首都直下地震ウイークのプロローグ。 30年以内に70％の確率で発生するとされる首都直下地震。あなたの命と暮らしを守るために、いま何ができるのか。みんなで防災を考えるため1週間にわたってお伝えする体感首都直下地震ウイークのプロローグ。明日から4日間連続でお伝えするドラマ「パラレル東京」の見どころと、知られざる首都直下地震の脅威について最新の知見に基づいてお伝えしていく。	②
2019	12	2	シリーズ　体感 首都直下地震 DAY1 あなたを襲う震度7の衝撃	命と暮らしを守るために、大地震を自分ごととして感じていただくシリーズの一日目。架空の東京で首都直下地震が起きたと想定し、ドラマとスタジオで被害の脅威を描く。 命と暮らしを守るために、大地震を自分ごととして感じていただくシリーズの一日目。架空の東京で首都直下地震が起きたと想定し、ドラマとスタジオで被害の脅威を描く。ドラマでは、主人公の若手キャスターが被災した東京にある架空の放送局で直下地震に翻弄されていく。スタジオでは地震による同時多発火災の恐ろしさなど被害の様相について解説し、ゲストとともにどうすれば命と暮らしを守れるか、考えていく。	②
2019	12	3	シリーズ　体感 首都直下地震 DAY2 多発する未知の脅威	命と暮らしを守るために、大地震を自分ごととして感じていただくシリーズの2日目、ドラマ「パラレル東京」では、大規模な広域通信障害など未知の脅威を描く。 命と暮らしを守るために、大地震を自分ごととして感じていただくシリーズの2日目。架空の東京で首都直下地震が起きたと想定し、ドラマとスタジオで被害の脅威を描く。ドラマでは、主人公の若手キャスターが被災した架空の東京にある放送局で直下地震に翻弄されていく。スタジオでは震災時のデマの恐ろしさ、広域通信障害など被害の様相についてゲストを交えてみつめていく。	②

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2019	12	4	シリーズ　体感 首都直下地震 DAY3 命の瀬戸際　新たな危機	命と暮らしを守るために、首都直下地震にどう備えるのか、シリーズ3日目はドラマ「パラレル東京」で発災から50時間を迎えた人々の避難生活の厳しさを描く。 シリーズ体感首都直下地震、3日目はドラマ「パラレル東京」で発災から50時間以上たった東京の姿を描く。大規模火災はようやく鎮火に向かいはじめるものの、各地の避難所では食料や水など物資の不足目立つ。そして、揺れや火災から生き残った人々の命が、また別の形で脅かされ始めるという事態に突入する。新たなフェーズに入った首都直下地震の被災地の被害の詳細を見ながらゲストを迎えてその脅威に向き合っていく。	②
2019	12	5	シリーズ　体感 首都直下地震 DAY4 危機を生きぬくために	命と暮らしを守るためにどうすればいいのか、シリーズ体感首都直下地震の4日目。ドラマ「パラレル東京」では堤防決壊という大規模な脅威に直面、さらに翻弄されていく。 シリーズ首都直下地震の4日目、ドラマ「パラレル東京」では、発災から80時間余りが経過した首都の姿絵を描く。浮かび上がってくるのは、私たちが目の前の危機に対ししっかり備えられているかどうか、いま一度足元を確認する必要性だ。スタジオではMC・ゲストが、大災害が私たちを襲ったときにどうなるのか、自分や、大切な人の身に何が起きるのか、想像し、十分考えておくことの重要性をかみしめる。	②
2019	12	7	シリーズ　体感 首都直下地震 終わりの見えない被災	首都直下地震の1か月後、1年後、10年後、私たちの暮らしや日本社会はどうなるのか？さらなる命の危機、住まいを失う“住宅難民”、リストラ・家族離散…過酷な現実だ。 首都直下地震の1か月後、1年後、10年後、私たちの暮らしや日本社会はどうなるのか？専門家たちの最新シミュレーションによって、日本の未来図「被災ツリー」が見えてきた。「10年後は地獄」と言う。私たちを待ち受けるのは、さらなる命の危機（関連死数千人）、住まいを失う100万人規模の“住宅難民”、リストラ・家族離散、数百兆円にのぼる日本の経済損失…日本は衰退していくのか？過酷な現実が見えてきた。	②
2019	12	8	シリーズ　体感 首都直下地震 災害に耐える社会へ	命と暮らしを守るために、大地震を自分ごととして感じていただくシリーズの最終日、対策編。被害を最小限に食い止めるために、今できることは何か。具体的な対策を紹介。 首都直下地震の脅威を描いてきたシリーズの締めくくりは、「今、何かできるのか」を考える。専門家は、正しい知識を持ち、的確な対策を打てば被害は減らせるという。　甚大な被害を生む火災の脅威から命を守るため、地域が焼失する予想に直面した住民たちの選択とは？供給網が寸断される中で企業は被災者に食料をどう提供していくのか？あらゆる機能や人口が集中した東京をどうしていくべきなのか？ドラマの出演者も交えて考える。	②

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2020	1	17	阪神・淡路大震災25年 あの日から25年 大震災の子どもたち	俳優・北川景子が阪神・淡路大震災の被災体験を告白。当時の小中学生に大規模調査。6割が震災体験を「前向き」にとらえていた。そのカギはどこに。子供たちの25年。 神戸出身の俳優・北川景子が阪神・淡路大震災の被災体験を告白。番組では社会心理学の専門家と当時の小中学生600人に大規模調査。専門家も驚く結果が明らかに。家族を失うなど大きな被害を受けた人でも、6割近くが今は震災体験を「前向き」にとらえていると答えた。前向きに転じるカギとして「先生」や「近所の大人」など家族以外の「周囲の大人」の存在が浮かび上がってきた。神戸から全国の被災地へ新たな教訓を伝える。	⑥
2021	1	17	巨大地震と“未治療死” ～阪神・淡路から26年　災害医療はいま～	コロナ禍で巨大地震が起きたら、救えるはずの命が守れない―。最新研究から見えてきた衝撃の事実。医療崩壊が起きた阪神・淡路大震災から26年。災害医療の最前線を追う。 新型コロナの時代に巨大地震が起きたら、救えるはずの命すら守れない事態が起きる―。専門家による最新研究の結果、コロナ禍で医療がひっ迫した状態で巨大地震に見舞われると、必要な治療を受けられずに亡くなる「未治療死」が続出、国の想定を超える死者が出る恐れがあることが明らかに。災害医療の原点となった阪神・淡路大震災から26年。あの日起きた医療崩壊の教訓を踏まえ、巨大災害への備えを進める最前線の現場を追う。	③
2021	9	12	MEGAQUAKE 巨大地震　2021 ～震災10年　科学はどこまで迫れたか～	次はいつ、どんな巨大地震が起きるのか？東日本大震災から10年、危機を予測し命を守る研究に新展開が。人工知能なども駆使した科学の到達点に迫る。　ゲスト：鈴木京香 あの日、東北沖であれほど巨大な地震と津波が起きることを想定できなかった科学者たち。深い悔恨と新たな決意を胸に、次こそは危機を事前に社会に伝えたいと、再び挑んできた。この10年で飛躍的に進歩した人工知能やスーパーコンピューター、宇宙からの観測などを駆使。巨大地震の「前触れ」をとらえ、「地震発生確率が高まっている地域」をあぶりだし、命を守ろうとする最前線を、宮城県出身の鈴木京香さんとともに見つめる。	①
2022	1	17	見過ごされた耐震化 ～阪神・淡路大震災　建物からどう命を守るか～	阪神・淡路大震災を機に進む住宅などの耐震化。一方、オフィスや飲食店などが入るビルの多くは、耐震性が不明である実態が明らかに。見過ごされてきた震災の教訓に迫る。 阪神・淡路大震災から27年たった今も見過ごされてきた教訓がある。オフィスや飲食店など、多くの人が立ち入る「ビルの倒壊」だ。地震が早朝に発生したことで、人的被害は住宅に集中し、震災後の耐震化施策は住宅を中心に進められてきた。一方、多くのビルはその対象から外れ、全国各地で耐震性が不明なビルが無数にあることが明らかに。巨大地震が起きるそのとき、あなたがいる建物は命を守れるのか。耐震化の実態に迫る。	③

放送年	放送月	放送日	タイトル	内容	小分類
2022	3	12	あなたの家族は逃げられますか？ ～急増 “津波浸水域”の高齢者施設～	あの日、津波で多くの命が失われた高齢者施設。震災後もリスクの高い場所に次々と施設が作られていることがNHKの調査で分かってきた。その背景とは？どう命を守るのか？ 体が不自由なお年寄り、その避難を手伝った職員…東日本大震災では高齢者施設で多くの命が失われた。被災した施設は74、亡くなった人は638人にのぼる。あれから11年、悲劇の教訓はどう生かされてきたのか。全国を調査すると、震災後も津波の“浸水想定区域”に高齢者施設が次々と作られていることが明らかになった。なぜリスクの高い場所に建てられ続けているのか？そして、そこで見つけた命を守るための貴重なヒントとは？	③